2025.3.15

邪馬台国論争と日本国家の起源

清水徹朗

１．「邪馬台国」とは何か

２．邪馬台国問題はなぜ重要か

３．邪馬台国論争の争点

４．研究・論争の歴史

５．鷲崎弘朋の邪馬台国論

６．邪馬台国と記紀神話

７．日本国家の起源と古代国家の形成

1.「邪馬台国」とは何か

「邪馬台国」とは**魏志倭人伝**に書かれた古代日本（2～3世紀）に存在した国

魏志倭人伝の正式名称は『三国志』魏書・東夷伝・倭人条、全体で1,984字

「三国」は魏・呉・蜀、「東夷」とは「東に住む異民族」のこと

著者は**陳寿**（233－297、西晋の人）

執筆されたのは**284－289年頃**……魏は265年に既に滅亡

「倭」「倭人」「倭国」「女王国」「邪馬台国」……「邪馬台国」は1か所のみ

「**南して邪馬台国に至る。女王の都とする所なり。水行十日、陸行一月。**」

「**郡から女王国に至るまで一万二千里なり。**」

女王「卑弥呼」（170頃－248）

「倭国乱れ、相攻伐すること暦年、すなわち**一女子を共立して王となす**。名は**卑弥呼**という。」

『日本書紀』では「神功皇后」の巻で「魏志倭人伝」の注（魏への遣使）が入っているのみ。邪馬台国、卑弥呼の名称は一切登場しない。

『古事記』には注もない。

2. 邪馬台国問題はなぜ重要か

魏志倭人伝は日本国家の起源を解明するうえで**最も重要な文献**

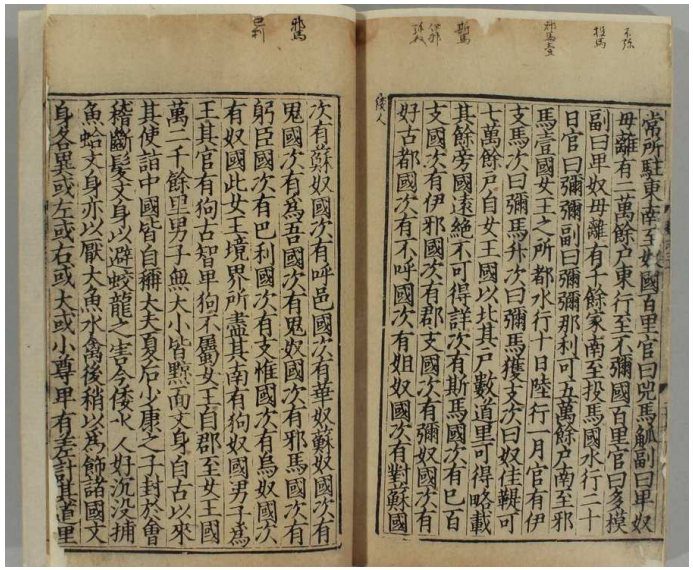
← この時代（3世紀）の日本を詳しく記述した文献は他にない

「日本書紀」「古事記」は大和政権、天皇家を正当化するため意図的な編集・改変が行われており、古い時代の記述内容は信頼できない

日本の国家形成史、天皇の起源については未解決の問題が多くある

……**「謎の四世紀」**

邪馬台国の位置によって日本の国家形成の過程、時期が変わる



3. 邪馬台国論争の争点

邪馬台国の所在地……九州説、畿内説、その他　←　日程・里程、方角

邪馬台国と大和政権の関係……継承か征服か、東征・東遷の可能性

邪馬台国の滅亡時期

卑弥呼と天皇家・天照大神の関係

卑弥呼の墓、箸墓古墳との関係

他の諸国の位置……狗奴国、投馬国、その他

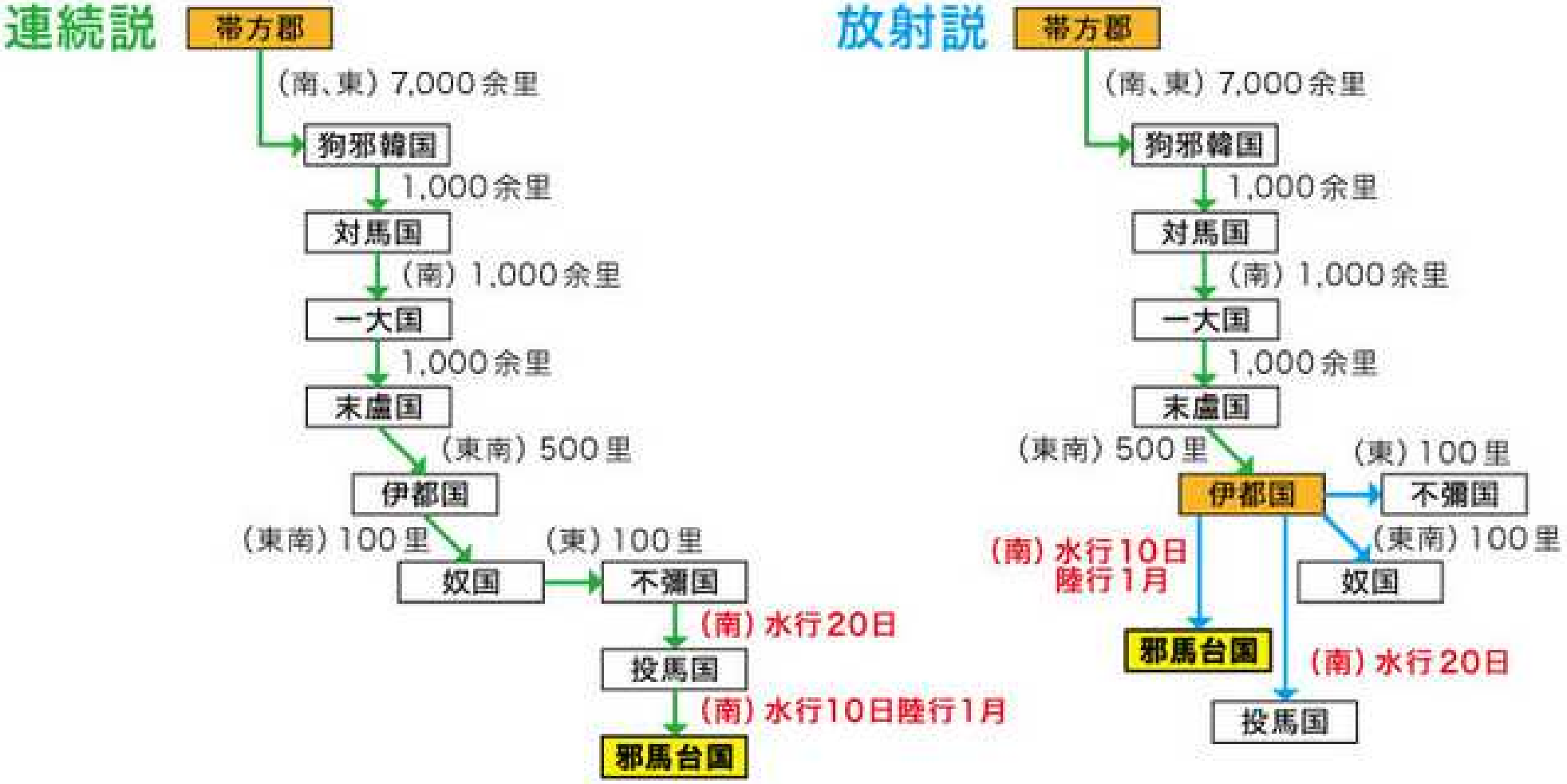
「また南、**投馬国**に至るのに**水行二十日**。」

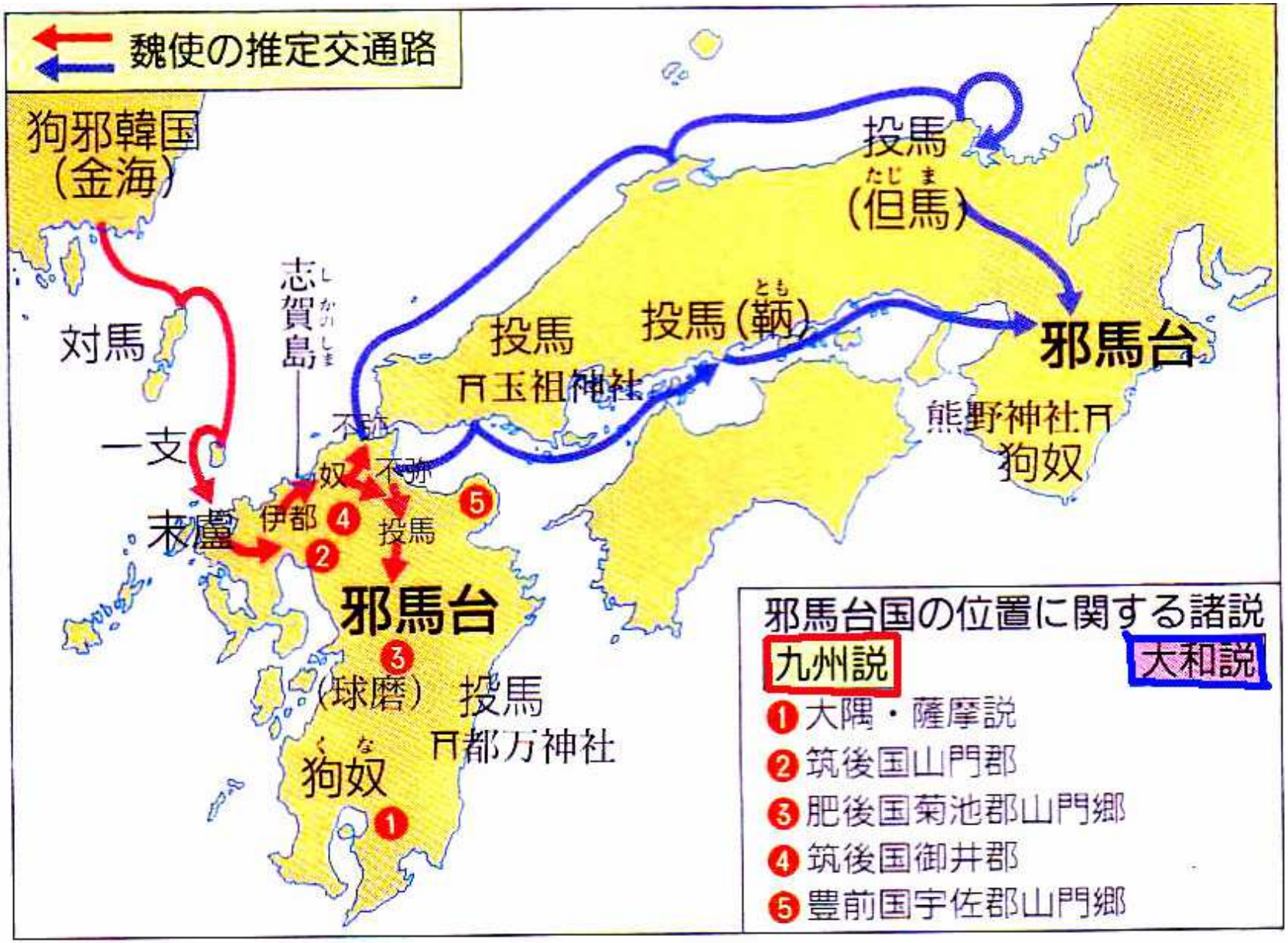
「その南にあるのが**狗奴国**で、男子を王とし、長官に狗古智卑狗がある。この国は**女王国に服従していない**。」

考古学の研究成果との関係……銅鏡（三角縁神獣鏡）、古墳、銅鐸

神話との関係……天孫降臨、日向三代、出雲神話、神武東征

風俗、風習


連続説
帯方郡
(南、東) 7,000余里
狗邪韓国
1,000余里
対馬国
(南) 1,000余里
一大国
1,000余里
末盧国
(東南) 500里
伊都国
(東南) 100里
(東) 100里
奴国
不彌国
(南) 水行20日
投馬国
(南) 水行10日陸行1月
邪馬台国
放射説
帯方郡
(南、東) 7,000余里
狗邪韓国
1,000余里
対馬国
(南) 1,000余里
一大国
1,000余里
末盧国
(東南) 500里
(東) 100里
伊都国
不彌国
(南) 水行10日
陸行1月
(東南) 100里
奴国
邪馬台国
(南) 水行20日
投馬国

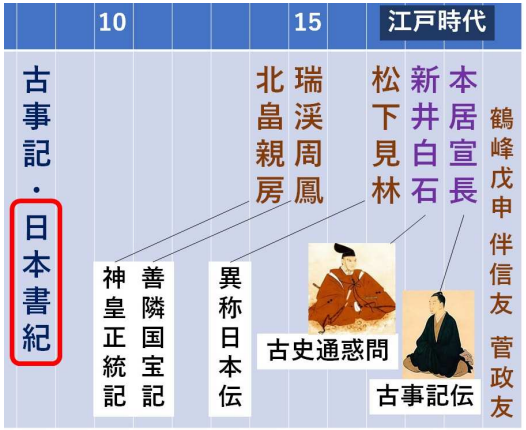

魏使の推定交通路
狗邪韓国
(金海)
対馬
一支
末盧
志賀島
伊都
奴
不弥
投馬
邪馬台
(球磨)
狗奴
投馬
(但馬)
投馬
投馬(鞆)
邪馬台
玉祖神社
熊野神社
狗奴
都万神社
邪馬台国の位置に関する諸説
九州説
大和説
1 大隅・薩摩説
2 筑後国山門郡
3 肥後国菊池郡山門郷
4 筑後国御井郡
5 豊前国宇佐郡山門郷

4. 研究・論争の歴史

[江戸期]

新井白石(1657－1725)……邪馬台国研究の先駆者、記紀神話を研究
「日本書紀」の紀年を疑問視
『古史通或問』(1716)……大和説、狗奴国は肥後国球磨郡
『外国之事調書』(1722)……筑後山門郡説に変わる

本居宣長(1730－1801)……国学の完成者、『古事記伝』(1798)
『馭戎慨言』(1796)…熊襲の女酋長が神功皇后の名を偽って魏に朝貢
魏に朝貢した人物はヤマト国の女王ではありえないと主張
（必ずしも「九州説」ではない）
「魏志倭人伝」の内容を信用していなかった



[明治期～戦前]

久米邦武(1839-1931)
佐賀県生まれ。幕末昌平黌に学び、明治4年**岩倉使節団**に随行し欧米諸国を訪問。「特命全権大使米欧回覧実記」を編纂。1888年帝大教授となるが、1892年に**筆禍事件**で退官(「神道は祭天の古俗」と指摘し神道家から攻撃を受ける)。実証主義の立場で日本古代史を講じ、『日本古代史』(1905)で邪馬台国問題を詳述。筑後山門説。

喜田貞吉(1871-1939)
徳島県生まれ。帝国大学で歴史学・地理学を学ぶ。京都大学、東北大学教授。久米の主張(筑後山門郡の神籠石は女王国、筑紫国造と関係)を支持。卑弥呼は土蜘蛛田油津媛(←神功皇后が誅す)の先々代。法隆寺再建非再建論争で再建説を主張。

白鳥庫吉(1865－1942)
千葉県生まれ、帝国大学史学科卒。東京帝大教授(東洋史学)。
「倭女王卑弥呼考」(1910)……北九州説を主張し、内藤湖南と論争になる。

内藤湖南(1866－1934)
秋田県生まれ。京都大学教授(東洋史)。
「卑弥呼考」(1910)…大和説。投馬国は志摩(三重県)、狗奴国は肥後国菊池郡。
卑弥呼は垂仁天皇の皇女**倭姫命**。魏志倭人伝の諸本を比較研究。
『日本書紀』の注(神功皇后)は選者による原注と指摘。

橋本増吉(1880－1956)
東京帝大卒、慶大教授。
1910「邪馬台国及び卑弥呼に就て」……筑後山門説。内藤湖南を批判

梅原末治(1893－1983)
考古学者、京大教授。江田船山古墳、西都原古墳を調査。大和説。

富岡謙蔵(1873－1918)
京都大学史学科講師。富岡鉄斎の息子。古鏡の研究。大和説。

笠井新也(1884－1956)
国学院大卒、東大で人類学を学ぶ(聴講生)。
「箸墓古墳は卑弥呼の墓」を主張。崇神天皇の崩年を258年とする。

和辻哲郎(1889－1960)
兵庫県で生まれる。哲学者、倫理学者。京大・東大教授。
主著は『古寺巡礼』(1919)、『風土』(1935)、『日本倫理思想史』(1953)。
『日本古代国家』で邪馬台国を論じる。
初版(1920)…九州説、神武東征＝九州における原初的国家が東方の大和に移った(3世紀末～4世紀前半)
改訂版(1925)……「畿内説も九州説もありうる」と書きかえる
再改訂(1939)…天照大神の神話を聞いた魏人が卑弥呼女王を創作(伝聞、想像)
「銅鐸中心の文化圏が銅鉾銅剣中心の文化圏によって統一されたとき日本の国家は形成された……2世紀のことであり、魏志に記されたときより百年古い」
新稿(1951)…「太陽神を皇祖とする信仰が4世紀以降、恐らく5世紀において成熟」

[戦後]

1946　肥後和男『天皇制の成立』……卑弥呼は「倭迹迹日百襲姫命」
1946　林屋友次郎『天皇制の歴史的根拠』……卑弥呼と天照大御神を結びつける
1947　三品彰英「日鮮共通の原始的政治形態－天皇制の萌芽とその本質」
1947　榎一雄「魏志倭人伝の里程記事について」……**放射説**を提唱、筑紫説
1948　藤間生大「政治的社会成立についての序論」……連合国家論、北九州説
1949　樋口隆康・岡崎敬「邪馬台国問題」……考古学者、畿内説
1950　**藤間生大『埋もれた金印－女王卑弥呼と日本の黎明』**
1952　和歌森太郎「私観邪馬台国」……畿内説、「東は南」
1952　小林行雄「邪馬台国の所在地について」……2世紀の北九州の中心は奴国
1954　原田大六『日本古墳文化』……邪馬台国は大和、狗奴国は毛野
1954　上田正昭「ヤマト王権の歴史的考察」…卑弥呼の支配は階級支配、王権の世襲
1955　小林行雄「古墳の発生の歴史的意義」……伝世鏡と同笵鏡、畿内説を主張
1958　上田正昭「邪馬台国問題の再検討」……畿内勢力による卑弥呼の「共立」
1960　**井上光貞『日本国家の起源』**……卑弥呼の時代は古墳時代ではない、上田批判
1963　史学会シンポジウム「東アジアと古代日本」…東アジアの歴史が重要（石母田正）
1964　松本清張『陸行水行』、『古代史疑』（1968）
1965　井上光貞『神話から歴史へ』
1967　宮崎康平『まぼろしの邪馬台国』

［銅鏡の研究］（福永伸哉『三角縁神獣鏡の研究』(2005)より）

1920年　**富岡謙蔵**が三角縁神獣鏡は卑弥呼の「銅鏡百枚」（魏鏡）と指摘

1920年代に「三角縁神獣鏡」という名称が定着

小林行雄（京都大学教授）による鏡の研究（1950～60年代）

鏡の形式、分布の研究→初期大和政権の成立過程と古墳出現の意義を解明

樋口隆康（京都大学教授、橿原考古学研究所所長）による包括的な三角縁神獣鏡研究

1972　島根県で景初3年（239年）の年号がはいった三角縁神獣鏡が発見される

正始元年（240年）の年号が入った鏡……群馬、兵庫、山口

実在しない景初4年の年号が入った鏡……京都

日本で出土した銅鏡……約4000面

うち三角縁神獣鏡は1割強の520面……3世紀中葉から4世紀の古墳に埋葬

→　古墳時代出現年代（西暦300年頃）は卑弥呼遣使の年代（240年代）より50年遅い

1981年　王仲殊（中国の考古学者）が三角縁神獣鏡日本製説を指摘

①中国で1枚も出土していない

②神獣鏡は華北では流行せず、江南で盛んに作られた → 呉の工人が日本で製造

←　日本製説は既に1962年に森浩一が指摘していた

福永氏は、銅鏡の中央部の鈕孔（ヒモを通す穴）を調べ、三角縁神獣鏡のうち中国製（魏晋の工人により華北東部で製造）が390面、日本製が130面であり、**三角縁神獣鏡が『魏志』倭人伝の「銅鏡百枚」にあたる可能性が高い**と指摘。

［古墳の研究］（岸本直文『倭王権と前方後円墳』(2020)より）

前方後円墳は「古墳時代」に10数万基築造される

前方後円墳共有システム……倭国王墓を規範として墳丘規模で序列化

前方後円墳こそ倭国の国家体制を体現したもの

3世紀初頭から6世紀末までの約400年間築造

7世紀に激減し、8世紀に消滅

← 冠位制の導入、制度的な君臣関係の確立

小林行雄「古墳の発生の歴史的意義」(1955)

西嶋定生「古墳と大和王権」(1961)

近藤義郎「前方後円墳成立論」(1983)

石野博信……纒向石塚古墳が最古の前方後円墳と指摘(1976)

寺沢薫……纒向型前方後円墳を提唱(1988)

「三角縁神獣鏡の副葬開始年代は250～260年代にさかのぼる。」

「これまでの考古学的な論証により、箸墓古墳の年代は3世紀中頃に特定できる。」

「考古学的な手続きによって導かれる箸墓古墳の年代、それは247年頃に没した卑弥呼の墓であることを指し示している。」

[日本古代国家形成史に関する研究]

[戦前における国家史研究]

・国学の系譜をひく皇国史観

・**建国神話（記紀神話）**、天皇中心主義的イデオロギー

・科学的な方法とは無縁のアプローチ

[1930年代よりマルクス主義史学による古代史研究が進展]

・1920年代よりマルクスの経済学、哲学、唯物史観が紹介される

・野呂栄太郎『日本資本主義発達史』(1930)

← しかし、研究に対する政府の弾圧・思想統制

[終戦後、「科学的」古代史研究再開]

・藤間生大『日本古代国家』(1946)

・石母田正「古代貴族の英雄時代」(1948) → 英雄時代論（津田左右吉の学問の克服）

・江上波夫「騎馬民族征服王朝説」(「日本民族=文化の源流と日本国家の形成」1949)

[アジア的生産様式論]

・塩沢君夫『古代専制国家の構造』(1958) ← スターリン批判(1956)

・1960年に井上光貞『日本国家の起源』(岩波新書)が出版され多く読まれる。

・『シンポジウム 日本国家の起源』(1967)[石田英一郎、井上光貞，江上波夫，小林行雄他]

［石母田正の古代史研究］

石母田正「古代史概説」（1960）･･･エンゲルス『起源』に依拠して日本の国家形成史を考察

（１）国家の萌芽（邪馬台国の時代）［3世紀］

（２）ヤマト政権の時代

①初期の形成期（崇神・垂仁）［4世紀中頃］

②中期の応神・仁徳朝［４世紀末～５世紀初］……朝鮮出兵、南朝鮮支配

③全国統一国家の確立［５世紀中頃～継体・欽明以前］

（３）ヤマト国家の時代［６、７世紀（継体・欽明から推古朝まで）］

⇒　日本の「国家」は推古朝に成立（大化の改新を重視）

①公権力が「王権」という形で確立

②官僚制的秩序（冠位12階、17条憲法）

③国造制による地域的・行政的支配領域の確立、人民の支配

・しかし、その後、日本書紀批判を受け、国家の成立を律令国家の段階に修正

『日本の古代国家』（1971）……「ミヤケ制と伴造＝部民制」→「国造制」（領域支配）

石母田正（1912－86）

宮城県石巻市で生まれる。父は石巻市長。二高を経て東京帝国大学哲学科に入学し、1937年に国史学科卒業。出版社、朝日新聞記者を経て1948年に法政大学教授に就任（1981年まで）。唯物史観の立場から日本の古代史、中世史を研究。主著『中世的世界の形成』（1946）、『日本の古代国家』（1971）、『日本古代国家論』（1973）。

[その後の研究の展開]

・その後、石母田の影響を受け、古代国家形成史の研究が盛んになった。

・吉田晶『日本古代国家成立史論』(1973)……「氏族制」と「国家」の関係、国造制

・門脇禎二「古代社会論」(1975)

① 小地域国家(奴国、伊都国)[1～2世紀]

② 地域統一国家(邪馬台国、キビ、イズモ)[3～5世紀]

③ 統一国家(6世紀中～7世紀末)

・原秀三郎『日本古代国家史研究』(1980)

……氏族制度が破壊されないままに国家段階に移行したアジア的専制国家

・山尾幸久『日本古代王権形成史論』(1982)……7世紀に古代国家形成

・都出比呂志『日本古代国家形成史論』(1991)

……都出は考古学者、前方後円墳体制を初期国家ととらえる

・前方後円墳体制・・・・・各地部族連合の首長と大和連合との擬制的同族結合

共通の葬礼、祭祀形態、王宮への出仕、軍事動員、鉄資源の分与、新技術の伝達

← 各地の首長たちがヤマト政権の傘下に入ることを希望した

［纒向遺跡の発掘］（寺澤薫の調査を中心に）

1971年　寺沢氏が初めて纒向遺跡の発掘現場を見る（当時 同志社大学3回生）
・森浩一氏［当時橿原考古学研究所指導研究員］とともに見学

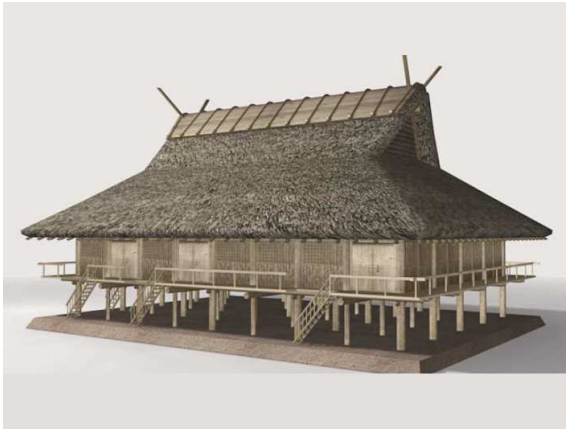
1972年　石野博信「古代纒向川の調査」
…「纒向式」を弥生時代後期末でなく古墳時代開始期と主張

1976年　箸墓古墳の出土品が公表される（宮内庁）
特殊器台……岡山県楯築墳丘墓でも発掘
石野博信・関川尚功編『纒向』→ 纒向遺跡が注目を集める

1979年　寺沢薫「大和弥生社会の展開とその特色」
纒向遺跡は大和弥生社会の内部的発展の延長ではなく、
外部勢力が加わって出現したもの。

1984年　寺沢薫「纒向遺跡と初期ヤマト政権」
纒向遺跡の「建物」は政治的祭祀的色彩の強い建物 ＝ヤマト王権の政治的中枢

2000年　寺沢薫『王権誕生』



[邪馬台国ブームと市民による古代史研究]

1960年代…第１次邪馬台国ブーム ← 作家（松本清張、宮崎康平等）が参加

1980年代…第２次邪馬台国ブーム ← 吉野ヶ里遺跡の発掘

「邪馬台国と卑弥呼には近づくな！」…1970年代の考古学界の風潮（寺澤薫による）

安本美典（1934－　）

満州国で生まれる。終戦後帰国、高校まで岡山県で暮らす。京都大学心理学科卒（大学院）。旧労働省に入省し、その後、産能大教授。1967年に『邪馬台国への道』を出版し、その後も多数の著作を発表。数理歴史学、統計分析を得意とし、言語学の研究も行った。**1979年に「季刊邪馬台国」を創刊、1983年に「邪馬台国の会」を発足。**

古田武彦（1926－2015）

福島県喜多方市生まれ。東北大学で日本思想史を学ぶ。高校教師を経て、昭和薬科大学教授。1969年に「邪馬壱国」論を発表し、『「邪馬台国」はなかった』（1971）、『失われた九州王朝』（1972）で注目を浴びた。親鸞の研究者でもある。「東日流外三郡誌」を巡って安本美典と論争。独特の歴史観は「古田史学」と呼ばれ、一部に熱烈な支持者がいる。

東アジアの古代文化を考える会

市民の古代史ファンを会員とし、1972年に発足（初代会長は江上波夫）。75年に「東アジアの古代文化」を創刊（2009年まで[137号]）。東アジアの視点から古代史を研究し、多くのアマチュア研究者を輩出した。

全国邪馬台国連絡協議会

2014年に全国の古代史研究会、アマチュア研究者を会員として発足。鷲崎弘朋が初代会長（6年間）。

[邪馬台国問題と年輪年代法]

・1996　大阪府池上曽根遺跡の大型建物の建造がBC52年と発表

…従来説（1世紀後半）より100年早い　→　“日本考古学史上の大事件”

→　邪馬台国畿内説が急浮上

（←吉野ヶ里遺跡発見[1989]により畿内説は劣勢だった）

・2008　国立歴史民俗博物館が箸墓古墳の築造時期を240～260年と発表

（土器付着物を炭素14年代法で計測）

→　産経新聞等が「邪馬台国畿内説に軍配」と報じる

→　福永伸哉（大阪大学教授）が「被葬者は卑弥呼」と発言

・2008　鷲崎弘朋「木材年輪年代法の問題点」（『東アジアの古代文化』）

・2009　鷲崎弘朋「炭素14年代法と邪馬台国論争」（『邪馬台国』101号）

… 100年遡上説は完全な誤り。基本となる標準パターンの作成時、飛鳥時代で年輪パターンの接続に失敗。「奈良時代～現在」は正しいが、「弥生時代中後期～古墳時代、飛鳥時代の測定値は100年古くずれている。

←　600～650年頃で年輪パターンの接続ミスの可能性がある。

・2011　春成秀爾他「古墳出現期の炭素１４年代測定」（歴博研究報告）

・安本美典「発表はまったく科学的ではない。自分たちの先入観の確認のためにデータを都合良く利用しているだけ。」

←　データの開示がなく、ブラックボックス化

[倉橋秀夫『卑弥呼の謎 年輪の証言』(1999)]

「長年、熱気をおびた議論が繰り返されてきた邪馬台国論争が、ここにきて、まったく新しい局面を迎えている。ひとことでいえば、これまでの流れが逆転した。つまり、畿内説がきわめて有力になり、ほとんど畿内説に決定したといってもいい事態を迎えているのである。」

「「年輪年代法」というまったく新しい方法で年代測定された結果、驚くべきことが判明した。見つかった大型建物の年代は、従来考えられていたよりもなんと100年も古いことが明らかになったのである。「年輪年代法」は、一年単位で正確に年代を割り出せる科学的年代測定法である。数値についてはきわめて信頼性が高い。」

「これまでの年代観では、古墳時代は3世紀末から4世紀の初めに始まるとされてきた。『魏志倭人伝』に描かれた卑弥呼の死は、紀元248年頃だ。今までは、この卑弥呼の死と古墳時代の始まりとの間に、数年の時間差があった。……ところが、近畿の弥生の年代観が古くなって、急速にクローズアップされてきたのは、卑弥呼の死と古墳時代の始まりが重なってきたことである。」

「池上曽根遺跡の年代測定の結果は、多くの古代史研究者に衝撃を与える事件となった。畿内の弥生社会に対する見方が根本的に変わり、邪馬台国論争の土台を揺さぶった。近畿地方の年代観がこれまでと大きく変わってしまったのだ。邪馬台国の所在地については明言をさける傾向にあった考古学者の多くが、この「大事件」以後、半年たち、一年たつうちに、はっきりと自説を唱え始めた。しかし、この大半が畿内説だ。100年も年代観が変わったことが、邪馬台国論争の決定的ターニングポイントになったのである。」

⇐ 近畿の弥生社会は北部九州より50～100年近く遅れるというのがそれまでの通説

都出比呂志（大阪大学教授）

「池上曽根遺跡の巨大建物が、『漢委奴国王』の金印の時代より100年古いことになり、近畿地方の先進性が証明されたことになる。」

岡村秀典（京都大学助教授）

「紀元前50年ごろは、北部九州に前漢鏡が入る時期、近畿はかなり遅れるといわれていたが、ほぼ同時期に中国文化を受容していたことになり、鏡の時代に合ってきた。古墳時代の始まりも三角縁神獣鏡の時期（3世紀）が近づくといえるのではないか。」

白石太一郎（国立歴史民俗博物館教授）

「箸墓は卑弥呼の墓で決着するかもしれない。」

森浩一（同志社大学教授）

「年輪年代は尊重しなければならないが、その解釈は考古学者の仕事。……前1世紀の柱が後に再利用されたとも考えられる。自然科学の一例で考古学者がカゼをひくようでは情けない。」

寺沢薫（橿原考古学研究所）

「実年代が100年近く繰り上がったとしても、古墳時代まで繰り上げて邪馬台国と結びつけるのは短絡的すぎる。」

直木孝次郎(京都大学教授)

「(吉野ケ里遺跡の発掘[1989]によって)邪馬台国が見えてきたといわれ、九州論者をふるい立たせた。いままで中立を保っていたが、これを機に九州論者に転じた考古学者もいる。……それから12年、またも局面は転回して畿内説が有利・有力になって来たように、私には思える。長い論争の歴史は、その方向で収束しつつあるのではなかろうか。理由はたくさんあるが、私は主要なものとしてつぎの三つをあげたい。(1)年輪年代法によって弥生時代後期の年代が明らかになったこと、(2)前期古墳の研究が進み、古墳成立の年代が従来より古く考えられるようになったこと、(3)中国の鏡、とくに後漢の鏡の研究が深まり、卑弥呼の時代の日本における後漢の鏡の分布状態が分かってきたこと、の三つである。」(『謎につつまれた邪馬台国』(2003))

「畿内説の立場からすると、小林説のこの弱点(*古墳の成立期[3世紀末以降]と卑弥呼の死(248年頃)の差異*)を克服して畿内説を確立する上に有力な力を発揮したのが、年輪年代法である。この方法によって、弥生時代後期の建物の柱根を計測すると、後期の年代が従来考えられていたのより約1世紀くりあがり、後期の終末は三世紀の中葉、連動して古墳時代のはじまりが三世紀後半のはじめと考えられるようになった。卑弥呼から鏡を分与された王(豪族の首長)は、半世紀待ってから古墳に埋葬したのではなく、分与を受けてまもなく(おそらく自分の死とともに)、古墳に埋めたと考えてよい。」(『邪馬台国と卑弥呼』(2008))

白石太一郎『古墳からみた倭国の形成と展開』(2013)

「最近の考古学的研究の著しい進展は、邪馬台国の時代にすぐ続く三世紀中葉すぎには、すでに大規模な前方後円墳が出現していたことはほぼ疑いないことを明らかにした。」

「こうした最近の考古学の研究成果からは、**前方後円墳の出現する直前の三世紀前半の邪馬台国が、北部九州にあったと考えることは、きわめてむずかしくなってきている**。」

「最近は、三世紀中葉ないし中葉すぎに巨大な前方後円墳が営まれる**近畿の大和の地が、『魏志』倭人伝にいう「邪馬台国」にほかならない**と考える考古学的研究者が圧倒的に多くなっている。」

「年輪年代法や炭素較正年代法といった自然科学的な年代決定法の進展」、「炭素１４年代の年輪補正の成果は、**基本的には信頼できる**ものととらえている。」

「画一的内容をもった「古墳」の成立こそが、列島中央部にヤマト政権と呼ばれる広域の首長連合が成長したことを物語る。」

「1980年代の終わりごろから若い研究者たちによって飛躍的に進展した三角縁神獣鏡の年代研究」

「箸墓古墳は、この時期の東アジア世界でも最大の墳丘墓であり、その**被葬者の候補として卑弥呼以外の人物を想定することはむずかしい**。」

関川尚功『考古学から見る邪馬台国大和説 ―畿内ではありえぬ邪馬台国』（2020）

1970年以降、50年間、奈良県内の古代遺跡を調査

→『魏志』に描かれている邪馬台国が奈良盆地の中に存在するという説については、どうにも実感がわかない。

それが証明できるような遺物も見当たらない。

大和説自体が大和の実情を検討した結果とはとても思えない。

唐古・鍵遺跡では鉄製品、青銅製品という金属器の出土は非常に少ない。

纒向遺跡は周辺の大古墳群造営のための「古墳造営キャンプ」（酒井龍一）

崇神天皇の崩年は318年（古事記の注記による）

大型古墳の出現時期を簡単に３世紀まで溯らせるというようなことは、容易なことではない。

箸墓古墳の年代は4世紀後半より大きく遡ることは考えられない。箸墓古墳と纒向遺跡の発展は４世紀。

今日では，大和の状況、特に纒向遺跡と箸墓古墳がある程度分かってきた以上、**もはや決着はついた**のではないか，というのが間近に見てきた著者の立場である。

安本美典『古代年代諭が解く邪馬台国の謎』(2013)

箸墓古墳は、竪穴石槨を有する可能性が高く（宮内庁資料による）、「棺あって槨なし」（魏志倭人伝）に反する。

ホケノヤマ古墳からは木槨や小型丸底土器が出土。小型丸底土器は、布留１式期の指標となる土器であり、360年を大きく遡れない。

大和朝廷の成立は280～290年であり、280年頃を境に、日本における鏡の分布は、北九州の内行花文鏡、方格規矩四神鏡から畿内、奈良県の三角縁神獣鏡、画文帯神獣鏡に移り変わる。

神武東遷は280年頃、崇神天皇の没年は360年頃。

安本美典『邪馬台国全面戦争－捏造の「畿内説」を撃つ－』(2016)

寺沢薫氏の「纏向学」は科学の名に値しない

根拠のない思い込みにもとづく妄想、解釈の捏造

ホケノヤマ古墳の築造年代は、炭素14年代法で測っても４世紀。

270年以前である確率は8～9％

寺沢氏は、箸墓古墳の築造年代は270～300年頃であるとしているが（布留０式古相期）、箸墓はホケノヤマより新しい。

若井敏明『邪馬台国の滅亡－大和王権の征服戦争』（2010）

「三世紀の日本列島に存在した倭国は女王、卑弥呼を戴く北部九州の地域的なまとまりであった。大和政権が日本列島の大部分を統一するまでは、各地に地域的な王権が存在した。」
「大和政権がその支配領域を格段に拡大した崇神・垂仁・景行の三代の間、王宮を営んだ地が、現在の奈良県桜井市、三輪山の麓に位置する纒向であった。」
「軍をひきいてやって来たのは大和政権の王タラシナカツヒコ、そしてその后オキナガタラシヒメ、のちの仲哀天皇、神功皇后であった。」
「このときの九州遠征は大和政権による統一事業のいわば締めくくりだった。」
「山門の攻略をもって畿内大和政権の九州遠征が完了した。」→ 邪馬台国の滅亡（367年）

［若井敏明］ 1958年奈良県生まれ。大阪大学卒、関西大学大学院修了。関西大学、佛教大学非常勤講師。

小林敏男『邪馬台国再考』（2022）

「**ヤマト国が北九州（女王国）と畿内ヤマト（邪馬台国）に二つあった。**」
「四世紀中頃までには畿内の邪馬台国は北九州の女王国を打倒し朝鮮半島に進出していく。」
「魏志倭人伝にみる邪馬台国は畿内ヤマトである。」
「三世紀中盤から後半段階のヤマトは王統十代の崇神天皇、十一代の垂仁天皇に時代であって、九州の女王国（ヒミコ、イヨ）と併存し、ときには対立した関係にあった。」
「伝承的には十二代景行天皇の時代に、九州の女王国は滅び去ったと思われる。」

［小林敏男］ 1944年長野県生まれ。神戸大学卒、東京教育大学博士課程修了。大東文化大学名誉教授。

５．鷲崎弘朋の邪馬台国論

『邪馬台国の所在地と日本国家の起源』(1996)

鷲崎弘朋(1942－2022)
東京大学法学部卒。日本軽金属勤務、新日軽(常務)を経て、全国邪馬台国連絡協議会初代会長(2014－2020)。2020年より日本古代史ネットワーク会長(2年間)。

Ⅰ　従来の邪馬台国論

１．畿内大和説
里程・日程(連続説・放射説、一万二千里、水行十日・陸行一月)、方角(東と南)
投馬国・狗奴国の比定、侏儒国・裸国・黒歯国
卑弥呼の墓(径百歩、殉葬者百人)
古鏡(銅鏡百枚、三角縁神獣鏡)、銅剣・銅鉾文化圏と銅鐸文化圏

２．筑後山門・御井説
九州説のうちの一つ、弱点……筑後川の沖積地で3世紀は湿地帯
「女王国の東、千余里を渡海すると、また国がある。みな倭種である。」

３．筑前甘木説
安本美典が主張、卑弥呼＝天照大神　←　天皇の在位年数
地名の一致(甘ちk木と大和)　←　邪馬台国東遷

４．筑前博多説
古田武彦の主張、邪馬「壱」国、一大卒が説明できない、投馬国は鹿児島(薩摩)

５．豊前中津・宇佐説
鷲崎説、富東隆が最初に提起(1953)、宇佐神宮の存在

Ⅱ　邪馬台国の位置－新「中津・宇佐説」

投馬国は山口県防府、狗奴国は南九州

帯方郡使は邪馬台国に行っていない　→　倭人からの伝聞

方向軸のずれ

女王国＝邪馬台国連合

Ⅲ　邪馬台国と日本国家の起源

1. 宇佐神宮古墳説

   宇佐神宮の祭神は**応神天皇、比売大神、神功皇后**

   道鏡事件

2. 邪馬台国・宇佐神宮と「記紀」の神話

3. 古代統一国家の形成

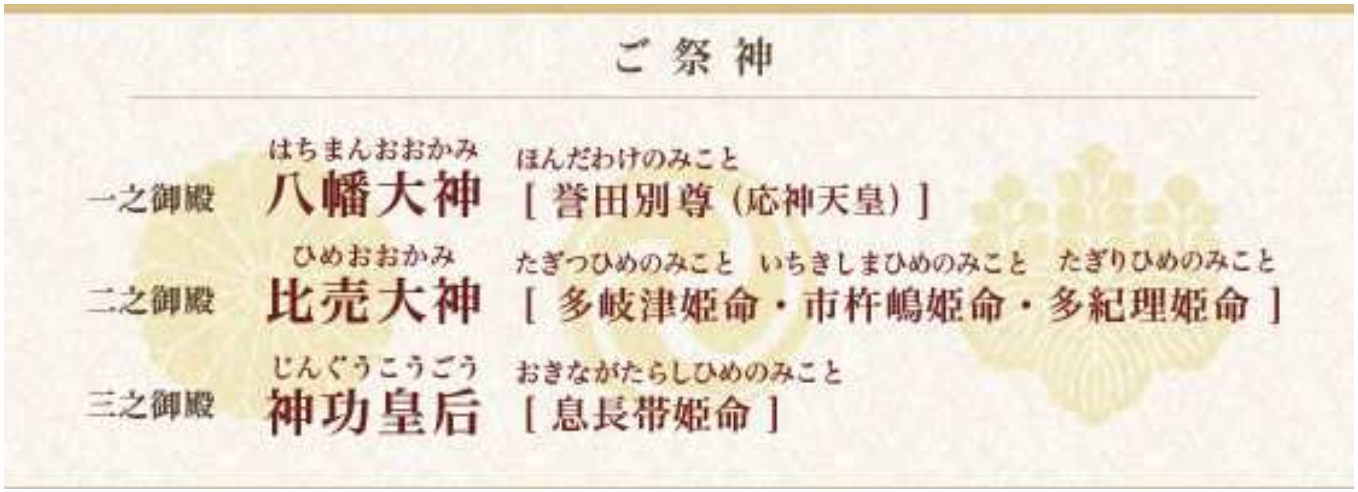
6. 邪馬台国と記紀神話

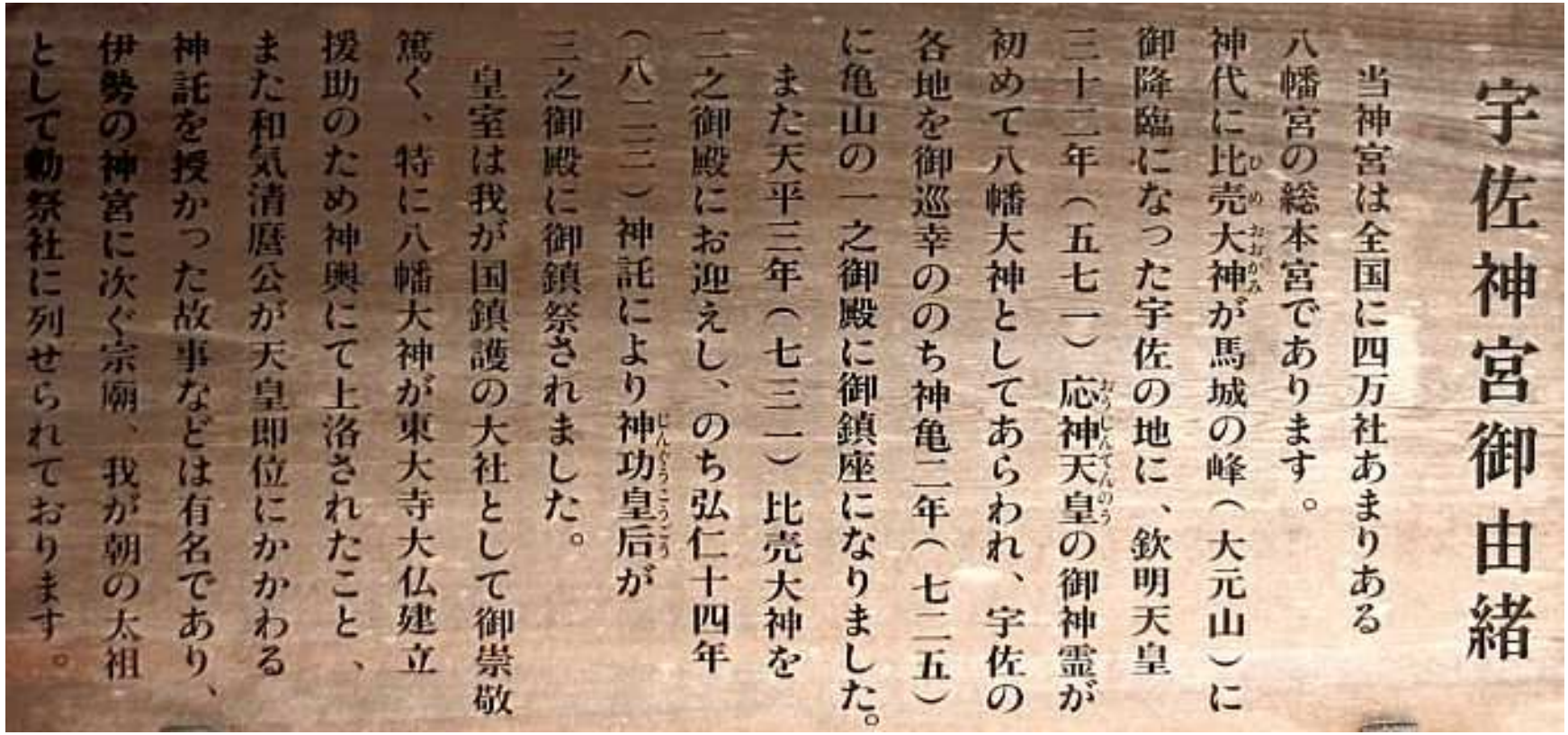
- 記紀の編者は多くの漢籍を参考にしており、当然「魏志倭人伝」を知っており読んでいた。しかし、「記紀」の中に邪馬台国、卑弥呼が出てこない（「日本書紀」には注がある）
- 「卑弥呼＝天照大御神」との見解……白鳥庫吉、和辻哲郎、安本美典
- 邪馬台国＝高天原
- 『日本書紀』は、日本の建国を中国に劣らず古い紀元前660年に設定し、天照大御神はそれよりもさらに古い神代の存在としている。
- 卑弥呼と天照大御神が同一人物であり3世紀の人であるという「疑い」を薄めるために**「神功皇后」を卑弥呼に見せかけようとした**。
- 『日本書紀』は**大和朝廷（天皇家）による日本支配を正当化**し、大和朝廷の起源とその発展を国内外に知らしめ、また後世に残すため国家的事業として作られた歴史書
- 卑弥呼は「親魏倭王」……中国の天子が臣下に与えた称号
- 神功を「天皇」とせず「皇后」にした←日本の最高指導者「天皇」は中国に臣従していなかったとの伏線を引いた
- 神功皇后は「虚像」、斉明天皇・持統期の史実をもとに創作（斉明天皇・持統天皇がモデル）

- 倭（日本）は紀元360～370年に国土統一が完成。この頃。百済と同盟して朝鮮進出を開始。390～410年に高句麗、新羅との間で激戦（→好太王碑の記録）
- 応神天皇の時代であり、応神天皇は「武神」として祭られた
- **宇佐神宮の主神「比売大神」が卑弥呼**
- 第三祭神（神功皇后）は平安時代（823年）に追加されたもの
  → 石清水八幡宮
- 大和朝廷は「卑弥呼・台与・邪馬台国」と「皇祖神天照大御神・高天原」を分離

→卑弥呼・台与を宇佐の地から伊勢神宮に移し天照大御神として祭った

→ 宇佐神宮と伊勢神宮は天皇家の二大宗廟





宇佐神宮御由緒

当神宮は全国に四万社あまりある八幡宮の総本宮であります。

神代に比売大神が馬城の峰（大元山）に御降臨になった宇佐の地に、欽明天皇三十二年（五七一）応神天皇の御神霊が初めて八幡大神としてあらわれ、宇佐の各地を御巡幸ののち神亀二年（七二五）に亀山の一之御殿に御鎮座になりました。

また天平三年（七三一）比売大神を二之御殿にお迎えし、のち弘仁十四年（八二三）神託により神功皇后が三之御殿に御鎮祭されました。

皇室は我が国鎮護の大社として御崇敬篤く、特に八幡大神が東大寺大仏建立援助のため神輿にて上洛されたこと、また和気清麻公が天皇即位にかかわる神託を授かった故事などは有名であり、伊勢の神宮に次ぐ宗廟、我が朝の太祖として勅祭社に列せられております。

伊勢神宮	天照大神（内宮）＝卑弥呼
	豊受大神（外宮）＝台与
宇佐神宮	比売大神＝卑弥呼・台与の実像
	神功皇后＝卑弥呼・台与の虚像
豊受大神は天照大神の姪（古事記）、台与は卑弥呼の宗女（倭人伝）。従って、台与は卑弥呼の姪だった可能性が高い	

7．日本国家の起源と古代国家の形成

[神武東征神話]

「神武東征」は**九州勢力が畿内を征服した歴史的事実**に基づいたもの（3世紀末～4世紀初）

大和朝廷、天皇の起源は九州……奈良時代には宇佐神宮の朝廷に対する影響力は伊勢神宮を上回っていた

大和、倭は九州の「邪馬台国」の名称を東征後に畿内大和朝廷が引き継いだもの

大伴氏、中臣氏、物部氏等の豪族の発祥地は九州……「天孫」

三輪氏、磯城氏、宇陀氏等の豪族は大和出身……「地祇」

[考古学的事実]

弥生時代の二大文化圏……①銅剣銅鉾文化圏（北九州・瀬戸内海）、②銅鐸文化圏（近畿・中部地方）　→　銅鐸文化圏は3世紀後半～4世紀初に突然消滅

銅鐸をもつ大和の先住民が九州から来た天皇家とその一党たちによって滅ぼされた

→ 記紀神話は鏡は出てくるが、銅鐸は登場しない

弥生時代に中国から輸入された銅鏡は九州から出土するが、畿内では出土しない

しかし、古墳時代になると銅鏡は畿内を中心に分布

墓に鏡を埋めるという習慣が北部九州から畿内に移った

鏡、剣、玉の三点セットは北部九州の墳墓から出土　→　天皇家の「三種の神器」

[東征の時期]

東征は3世紀末～4世紀初に行われた（紀元300～310年頃）

半島での新羅、高句麗との戦争（4世紀後半～5世紀）の前

好太王碑（広開土王碑）……好太王（高句麗の王）は391年の即位

倭は391年、399－400年、404年、407年の4回、朝鮮に遠征軍を派遣

大和政権の朝鮮への最初の軍事活動は367年

「神武東遷」ではなく「神武東征」……大和の既往勢力と戦争（＝征服戦争）

→　4世紀前半に日本統一事業……崇神、垂仁、景行

[邪馬台国と東征の関係]

邪馬台国の勢力は引き続き九州に残存

水野祐……狗奴国（南九州の勢力）東遷説

牧健二……投馬国（宮崎）東遷説

水野説は騎馬民族征服王朝説の新版＝応神天皇は新しい王朝の始祖

応神天皇は朝鮮からやってきた可能性がある（井上光貞）

薩摩隼人は勇猛

日向（宮崎県）が神武東征の出発点・・・・天皇家と日向の血族的関係

5世紀の天皇（倭の五王）の妻は葛城家と日向が多い

スサノオは狗奴国王　→　追放される

「卑弥呼－台与」が「正統」で素戔嗚命は対抗勢力

神武東征の主体は「日向（狗奴国）と宇佐勢力（邪馬台国）の連合」

[東征の動機]

① 東アジアの勢力地図が変わった

・280年に晋が呉を滅ぼし中国を統一

・しかし、その後、晋は内部崩壊し(318年)、五胡が侵入　→　南北朝時代

・313年に楽浪郡が滅亡

② 宇佐勢力は九州王朝の権力主体でなくなる　→　新天地へ

③ 九州は小国の乱立状態　→新たな強力な中央集権国家の確立を目指した

[東征の主人公]

「神武＝崇神」説は可能性がある、「ハツクニシラススメラミコト」が二人いる

神武天皇は存在しない……崇神天皇の分身

四道将軍の派遣先は近畿周辺の地方政権……日本全土は統合していない

「神武＝応神」説は成立しない……時代が異なる

応神天皇は入り婿(井上光貞)…景行天皇の曽孫ナガツヒメ → 仁徳天皇を生む

[古代統一国家形成のシナリオ]

3つの仮説（鷲崎は①を支持）

① 300年頃に近畿大和朝廷成立　←　東征

　4世紀後半までに応神王朝の日本統一を完成

　5世紀の倭の五王は近畿大和朝廷の王

　6世紀の「磐井の乱」は筑紫君磐井による中央への反抗

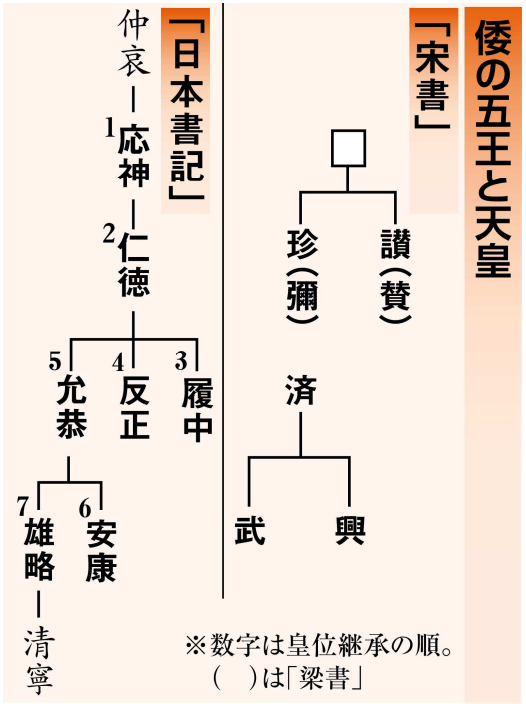
② 九州王朝は長期にわたり残存

　5世紀の倭の五王は九州王朝の王

　磐井の乱（527-528）により九州王朝は滅亡 → 大宰府設置

③ 九州王朝は磐井の乱以降も存続

　最終的な滅亡は白村江の敗戦（663）の時……古田武彦説



応神天皇陵、仁徳天皇陵……日本はその頃に強大な軍事力を有していた

日本と朝鮮半島の関係の記録は多くある……366～663年の27年間に81回

「日本書紀」の編者（大和朝廷）は「倭の五王」のことを書かなかった

　←　倭の五王は中国（宋）に臣従（11回遣使）

日本は中国と対等であることを示したかった

［まとめ］

300－310年　　東征（崇神天皇）

350年頃　景行天皇が九州を平定

350―360年　　関東・東北地方へ進出（日本武尊）

この50～60年間で大和朝廷は国土を統一

360―370年　仲哀天皇……朝鮮半島へ進出

その後300年間にわたり新羅、高句麗と派遣争い

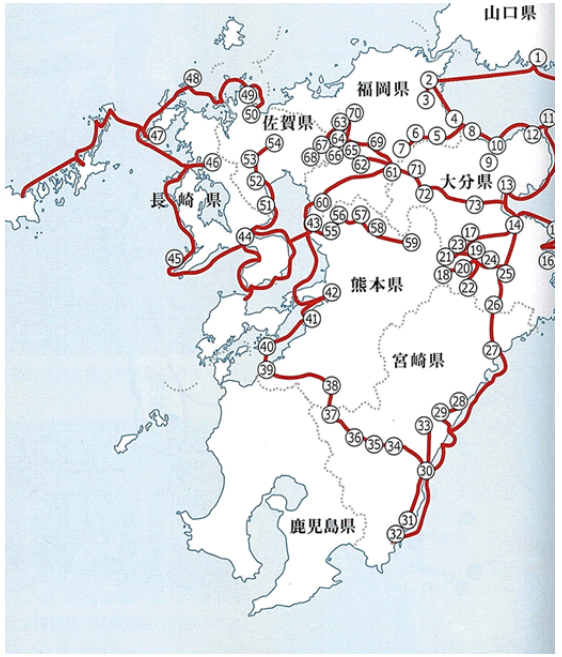
390－410年　朝鮮半島へ侵攻（応神天皇）……好太王碑

→　応神天皇は「武神」となる

460－470年代　雄略天皇期…高句麗、新羅との対立が再燃

⇒　天皇を頂点とする強力な中央集権的国家形成

景行天皇九州遠征経路



魏志倭人伝 （全文）

平野邦雄氏の訳をネットから借用

倭人は、帯方郡の東南の大海の中にあり、山や島によって国や村をなしている。もと百余国に分かれていて、漢の時代に朝見してくるものがあり、現在では、魏またはその出先の帯方郡と外交や通行をしているのは三十国である。

帯方郡より倭に行くには、朝鮮半島の西海岸に沿って水行し、韓の国々を経て、あるいは南へ、あるいは東へと進み、倭の北岸にある狗邪韓国に到着する。これまでが七千余里である。

そこから、はじめて一海を渡ること千余里で、対馬国に到着する。その国の大官を卑狗、次官を卑奴母離という。居るところは絶島で、広さ四百余里平方ばかり、その土地は、山は険しく、深林が多く、道路は獣のふみわけ道のようである。千余戸があり、良田はなく、住民は海産物を食べて自活し、船にのり南や北と交易して暮らしている。

また南に一海を渡ること千余里で一支国に到着する。この海は瀚海と名づけられる。この国の大官もまた卑狗、次官は卑奴母離という。広さ三百里平方ばかり、竹木・叢林が多く、三千ばかりの家がある。ここはやや田地があるが、水田を耕しても食料には足らず、やはり南や北と交易して暮らしている。

また一海を渡ること千余里で、末盧国に到着する。四千余戸があり、山裾や海浜にそうて住んでいる。草木が繁り、道を行くのに前の人は見えない位である。人々は魚や鰒を捕まえるのが得意で、海中に深浅となり潜り、これらを取って業としている。

そこから東南に陸行すること五百里で伊都国に到着する。長官を爾支、次官を泄謨觚・柄渠觚という。千余戸がある。代々王がいたが、かれらは皆、女王国に服属しており、帯方郡からの使者が倭と往来するとき、つねに駐るところである。

これから先は、東南、奴国にいたるのに百里。長官を馬觚、次官を卑奴母離という、二万余戸がある。おなじく東、不弥国に至るのに百里。長官を多模、次官を卑奴母離という。千余家がある。

また南、投馬国に至るのに水行二十日。長官を弥弥、次官を弥弥那利。五万余戸ばかりある。

また南、邪馬台国に至るのに水行十日・陸行一月。ここが女王の都するところで、長官を伊支馬、次官以下を弥馬升・弥馬獲支・奴佳という。七万余戸ばかりがある。

このように、女王国より北の諸国は、その戸数と道里をほぼ記載することができるが、その他の周辺の国は、遠くへだたり、詳しく知りえない。そこで、それらを列挙すると、斯馬国・巳百支国・伊邪国・都支国・弥奴国・好古都国・不呼国・姐奴国・対蘇国・蘇奴国・呼邑国・華奴蘇奴国・鬼国・為吾国・鬼奴国・邪馬国・躬臣国・巴利国・支惟国・烏奴国・奴国で、ここまでで女王国の境界はつきる。

そしてその南にあるのが狗奴国で、男子を王とし、長官に狗古智卑狗がある。この国は女王国に服従していない。

帯方国より女王国までを総計とすると一万二千余里となる。

倭では、男子は成人も子供もみな顔や体に入墨をしている。昔から倭の使が中国に来るとき、みな大夫と称する。夏王朝の六代の王小康の子が、会稽郡に封ぜられたとき、断髪して入墨し、海中にひそむ蛟龍（みずち）の害を避けたという。今、倭の水人は海中に潜って魚や蛤を捕え、体に入墨して大魚や水鳥から身を守ってきたが、後にはやや飾りとなった。倭の諸国の体の入墨は、国々によって左右や大小などにちがいがあり、身分の尊卑によっても異なる。

倭の風俗は折目正しくきちんとしており、男子はみな冠をかぶらず、木綿の布で頭をまき、衣は幅広い布をただ結び束ねるだけで、繕うことはない。婦人はお下げや髷を結ったりして、衣は単衣のようにし、真中に穴をあけて頭を通して着るだけである。人々は稲、苧麻（からむし）をうえ、桑・蚕を育て紡績し、上質の布・・真綿などを産出する。その地に、牛・馬・虎・豹・羊・鵲はいない。兵器には、矛・楯・木弓を用い。木弓は下を短く、上を長くし、竹の矢には、鉄鏃や骨鏃を用いる。要するに、これらの産物や風俗などをみると、儋耳、朱崖と同じである。

倭の地は暖かく、冬も夏も生野菜を食べる。人々ははだしで生活し、家屋を立てるが、父母兄弟はそれぞれに居所を異にしている。朱・丹を体に塗るのは、中国で白粉を用いるようなものだ。飲食には高杯を用い、手づかみで食べる。死ぬと棺に納めるが、槨は作らず、土を盛り上げて家をつくる。死んだとき、さしあたって十余日は喪に服し、その間は肉を食べず、喪主は声をあげて泣き、他人はその周りで歌舞・飲酒する。埋葬すると、一家をあげて、水中でみそぎをし、中国で一周忌に練絹を着て沐浴するのとおなじようにする。

倭人が海を渡って中国に来るには、つねに一人は頭をくしけずらず、しらみも取らせず、衣服は汚れたままとし、肉を食べず、婦人を近づけず、あたかも喪に服している人のようにさせて、これを持衰と名づける。もし、航海が無事にゆければ、かれに生口・財物を与え、もし船内に病人が出たり、暴風雨に会ったりすれば、これを殺そうとする。つまり持衰が禁忌を怠ったからだというのである。

倭の地には、真珠・青玉を産する。山には丹が出る。樹木としては、木冉（たん）・杼（とち）・豫樟（くすのき）・（ぼけ）・櫪（くぬぎ）・投（すぎ）・橿（かし）・烏号（やまぐわ）・楓香（かえで）があり、竹には、篠（ささ）・（やたけ）・排支（かづらだけ）があり、また薑（しょうが）・橘（たちばな）・椒（さんしょ）・襄荷（みょうが）もあるが、滋味ある食物として利用することは知らない。また猴（おおざる）・黒雉（きじ）もいる。 その通俗の行事や旅行にさいして、何かしようとすれば、骨を灼いて吉凶を占い、まず占うところを告げ、その解釈は中国の亀トの法のように、火で焼けたひびわれをみて兆しを占うのである。

その集会や居住の坐位には、父子男女の区別はなく、**人々は性来酒が好きである**。支配身分の人に尊敬を示す作法は、ただ拍手をして、中国の跪拝の礼にあてているようだ。人の寿命は、あるいは百年、あるいは八～九十年で、その習俗は支配身分の者はみな四、五人の妻をもち、一般の村民でも二、三人の妻をもっている。婦人は淫らでなく、嫉妬もしないし、盗みもなく、争いごとも少ない。法を犯せば、軽いものは妻子を没官され、重いものは家族と一族が殺される。身分の上下の秩序はよく守られ、十分に臣服している。租税、賦役を収め、そのための建物（倉）がたてられ、国々には物資を交易する市があり、大倭に命じて、これを監督させている。

女王国より北には、とくに一大率をおいて諸国を検察させている。諸国はこれを畏れ憚っている。一大率はつねに**伊都国におかれる**が、これは中国の州の刺史のようだ。女王が使を遣わして、洛陽や帯方郡からの使が倭に来たばあい、何れも伊都国の港頭で臨検し、文章や賜物を調べ、女王のもとに届けるものが、これと違わないようにした。

身分の低い一般の村民が、支配身分のものと道で出会うと、あとずさりして路傍の草むらに入り、これに辞を伝え、また事を説明するには、蹲ったり、跪いたりして、両手を地につけ、尊敬の意をあらわす。そのときの受け答えの声を噫というが、中国でいえば承諾の意味と同じことだ。

その国は、もとは男子を主としたが、七～八十年ほど前、倭国が乱れ、何年もお互いに攻め合ったので、諸国は共に一女子を立てて王とした。これを卑弥呼という。彼女は神がかりとなり、おそるべき霊力を現した。すでに年をとってからも、夫をもたず、弟がいて、政治を補佐した。王となってから、彼女を見たものは少なく、婢千人をその身辺に侍らせ、ただ一人の男子が飲食を給し、女王の言葉を伝えるのに居処に出入りした。宮殿・物見櫓・城柵などは厳重に設けられ、つねに兵器をもった人々がこれを守衛していた。

王国の東、海を渡ること千余里で、また国々があり、これからもすべて倭種の国である。また侏儒国はその南にあり、人々の身長は三、四尺で、女王国と四千余里離れている。また裸国・黒歯国はその東南にあり、舟行一年で到着できるという。

これらを含めて倭地の様子を尋ねると、海中の島々の上にはなればなれに住んでおり、あるいは離れ、あるいは連なりながら、それらを経めぐれば、五千余里にもなるだろう。

景初二年六月、倭の女王は大夫難升米を帯方郡に遣わし、魏の天子に朝献したいと請求した。帯方太守夏は、役人を遣わし、これを引率して洛陽に至らしめた。その年の十二月、魏の明帝は詔して、倭の女王に次のように述べた。「親魏倭王卑弥呼に命令を下す。帯方郡大守夏が使を遣わし、汝の大夫難升米と次使都市牛利を送り、汝の献じた男の生口四人、女の生口六人、班布二匹二丈を奉り、わがもとに至った。汝の国ははるか遠いのに、使を遣わし朝貢したのは、汝のわれに対する忠孝の現われで、感心なことである。今、汝を親魏倭王に任じ、金印・紫綬を与えることにし、それを包装して帯方太守に託して、汝に授けることとした。汝は倭人を綏撫しわれに孝順をなせ。汝の使者難升米と牛利は、遠くからはるばる労して来朝したので、難升米を率善中郎将、牛利を率善校尉に任じ、共に銀印・青綬を授けることとし、引見し賜物してこれを送り返す。今、絳地交龍錦五匹・絳地粟ケイ張・セン絳五十匹・紺青五十匹を汝の国信物にたいする回賜として与え、またとくに、汝に紺地句文錦三匹・細班華五張・白絹五十匹・金八両・五尺刀二口・銅鏡百枚・真珠・鉛丹各々五十斤を与えよう。

これらの品物は、みな包装して難升米と牛利に託するので、かれらが帰国したら、簿録（物品目録）と品物を照合して受取り、悉く汝の国の人々に示し、魏が汝を大切に思っていることを知らせなさい。よって鄭重に、汝の好物を与えるのである。」と。

正始元年、帯方太守弓遵は、建中校尉梯儁らをつかわし、この詔書と印綬をもって倭国に行かせた。使者は、魏の小帝の使者という立場で、倭王に謁し、詔書をもたらし、賜物としての金帛・錦・刀鏡・采物を贈った。倭王はこれに対し、使者に託して魏の皇帝に上表文をおくり、魏帝の詔と賜物に答礼の謝辞をのべた。

同四年、倭王はふたたび大夫伊声耆・掖邪狗ら八人をつかわし、生口・倭錦・絳青縑・緜衣・帛布・丹・木狗・短弓矢を献上した。掖邪狗らは、率善中郎将の印綬を授けられた。同六年、少帝は詔して、倭の使者の難升米に、黄色の軍旗をあたえることにし、帯方郡に託して、これを授けさせた。

同八年、帯方郡の太守王があらたに任官された。**倭の女王卑弥呼はもともと狗邪国の男王卑弥弓呼と不和**で、倭の載斯烏越らを帯方郡につかわし、互いに戦っている状況を報告した。そこで太守は塞曹掾史張政をつかわし、先の詔書と黄色の軍旗をもって行かせ、難升米に授けて檄文をつくって卑弥呼に教えさとした。

その後、卑弥呼が死んだ。多いに**冢を作りその径は百余歩、殉葬された奴婢は百余人**であった。倭では女王の死後男王を立てたが、国中が服従せず、互いに殺し合い、このとき千余人が殺されたという。そこでまた**卑弥呼の宗女である年十三の壹与を立てて王とし**、国中がようやく治まった。張政らは、檄文をもって、壹与を教えさとした。壹与は倭の大夫善中郎将の掖邪狗ら二十人をつかわし、張政らの帰国を送らせた。よってかれらは魏の朝廷にいたり、男女の生口三十人を献じ、白珠五千孔・青大勾珠二枚・異文雑錦二十匹を貢進した。